

燃えるアッシュ・ロード

アイバン・サウスオール作

石井桃子・山本まつよ訳

中川宗弥 画



燃えるアッシュ・ロード

アイバン・サウスオール作 石井桃子・山本まつよ訳 中川宗弥画

アイバン・サウスオール

1921年オーストラリアのメルボルン郊外に生まれた。少年時代から作家をこころざし、16歳で「メルボルン・ヘラルド」紙に作品が掲載されたのを機に、創作活動に入った。

第二次世界大戦がはじまると、イギリス空軍に入隊、1943年からは、イギリスのブリスベン空軍基地に所属するパイロットとして実戦に参加した。

1946年、ロンドン生まれの夫人をともなってメルボルンに帰ると、ふたたび作家生活にもどり、オーストラリア出身の第二次大戦の勇士ブルーイ・トラスコットの伝記で、オーストラリアばかりでなく、海外にも名を知られるようになった。帰国後三年目から、『燃えるアッシュ・ロード』の舞台になった農村に移り住み、「ヒルス・エンド」など、オーストラリアの人と土に根ざした小説や物語を書きつづけている。その作風は、心理の動きを中心にした性格描写に重きをおき、「燃えるアッシュ・ロード」は、オーストラリア児童図書審議会から、1966年度児童図書最優秀賞を贈られ、英米でも大きな反響を呼んだ。

石井 桃子

日本女子大卒。創作には「ノンちゃん雲に乗る」「三月ひなのつき」、英米児童文学の翻訳では「クマのプーさん」「ムギと王さま」「チム・ラビットのぼうけん」などがある。東京在住。

山本まつよ

神戸女学院専門部卒。「子ども文庫の会」によって、家庭文庫づくりの運動と翻訳に従事（「ルーシーのぼうけん」「ルーシーの家出」）。東京在住。

中川 宗弥

東京芸術大学美術学部油絵科卒。どの美術団体にも属さず、独自の立場で制作をつづけている。さし絵には、「ももいろのきりん」「チム・ラビットのぼうけん」などがある。東京在住。

燃えるアッシュ・ロード

©1968年6月10日 初版発行

©1968年11月25日 再 版

訳 者 石井桃子・山本まつよ

発 行 子ども文庫の会

東京都港区南青山2丁目23番8号 外苑ビル303号・電話(403)0841・振替東京142887

印 刷 音羽整版株式会社・有限会社土橋印刷所・幸英社印刷株式会社

製 本 帝都製本株式会社

定 価 580 円

原作者のことば

何年ものあいだ、わたしは、長い丘の上に住んでいた。まがりくねったいなか道が、その丘の上を走っていた。その道は、アッシュ・ロード（ナナカマド道）と呼ばれてはいなかった——それとも、そういう名だったのだらうか。わたしの知るかぎり、かつて、そういう名で呼ばれたことがあったとしても、いいような気がするのだが。

この道にそって住んでいた人びとのすべてを、わたしは友人と考えた。いまでもそう考えている。が、この物語のなかのアッシュ・ロードに住む男や女、少年少女たちは、わたしの想像のなかにだけ生きている人びとである。そのひとりひとは、わたしの知っている人たちや、わたし自身の内から生まれたといういみでは、生きているといえるだらう。しかし、実在の人を写そうとして描いた人物は、ひとりもない。

わたしは、この物語を、幼なじみで、ごく最近世を去ったローナに、愛情をこめてささげるのだが、そのローナさえ、この物語のローナとは、べつである。

しかし、この物語のなかにおこったできごと、これは架空のものではない。このできごとがおこったとき、わたしたちは、いよいよその大事が、じぶんたちの身にふりかかったことを知り、それが終わったとき、わたしたちは、それを信じるができなかった。

訳者のまえがき

これは、オーストラリアの作家の書いた、オーストラリアの物語である。この物語をよりよく理解していただくために、いくつかのことをここにあげておきたい。

完全に南半球に位する大陸、オーストラリアは、面積が七、七〇三、八六七平方キロメートル。これは、アメリカ合衆国より、ごくわずか小さく、日本全土の約二十一倍ということである。この面積の三分の一は砂漠、三分の一は、水が不足なため、人が住めず、主として東南部を中心とするあとの三分の一に、約千六百十五万余名（一九六六年末現在）の人口の大半が、さまざまな営みをして暮らしている。その九十パーセントは、イギリスから移住してきた人びと、または、その子孫である。

南半球にあるため、当然、この国の夏は日本の冬で、日本の夏は、この国の冬にあたる。この物語の主要人物である、グレアム、ハリー、ウォーレスの三少年が、一月の休暇に、ここに物語られるような大事をひきおこすのも、この時期が、オーストラリアの真夏であり、この国の北風が、「太陽の熱で茶いろにこげ、パリパリにかわいた二千キロの大陸をわたってきた風」だからである。

このようにオーストラリアには、地理にも、歴史にも特殊なものがあるため、この物語

にもこの国特有のものが出てくる。あることは、その地理と歴史に密着しているもので、日本語になおさず、そのままのこしておいた。

たとえば、ブッシュだが、これは、森林やジャングルほど樹木が密生していないので、木もどちらかというと、あまり大きくない未開の原生林である。イギリス人は、植民の途中、オーストラリアやアフリカのこうした原生林をブッシュとよんだ。

クリークもまた、イギリス人が、旧植民地にのこしたことで、川の支流、小川などを総称している。オーストラリアのクリークは、雨季には、水かさが増し、乾季には、水の干あがってしまうものが多い。

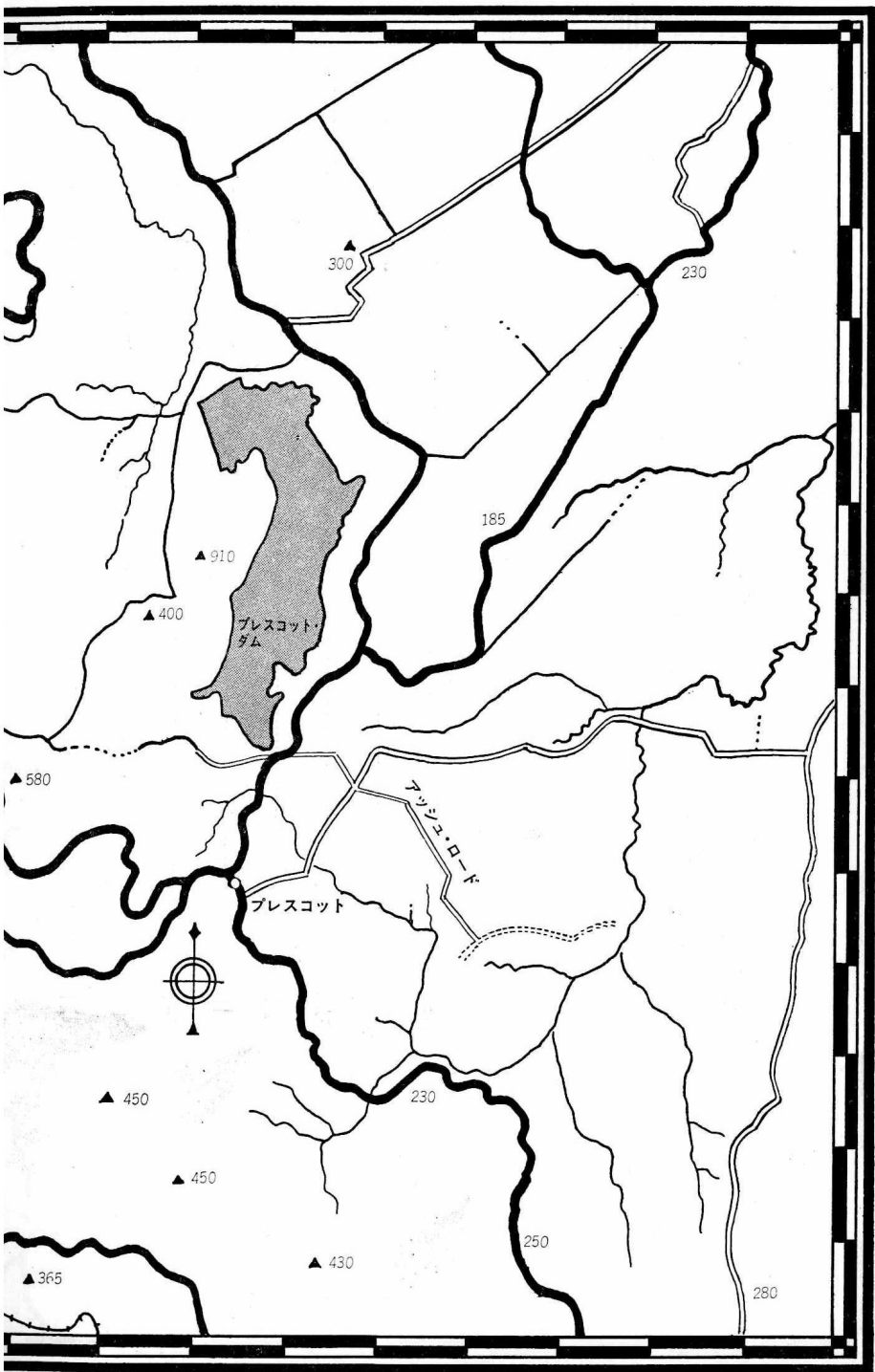
また、この話の中の、グレアム少年たちは、中学四年だが、オーストラリアの学校制度は、州にもよるが、大体六・六・四制で、中学が六年であるため、この少年たちは、日本の高校一年生にあたる。

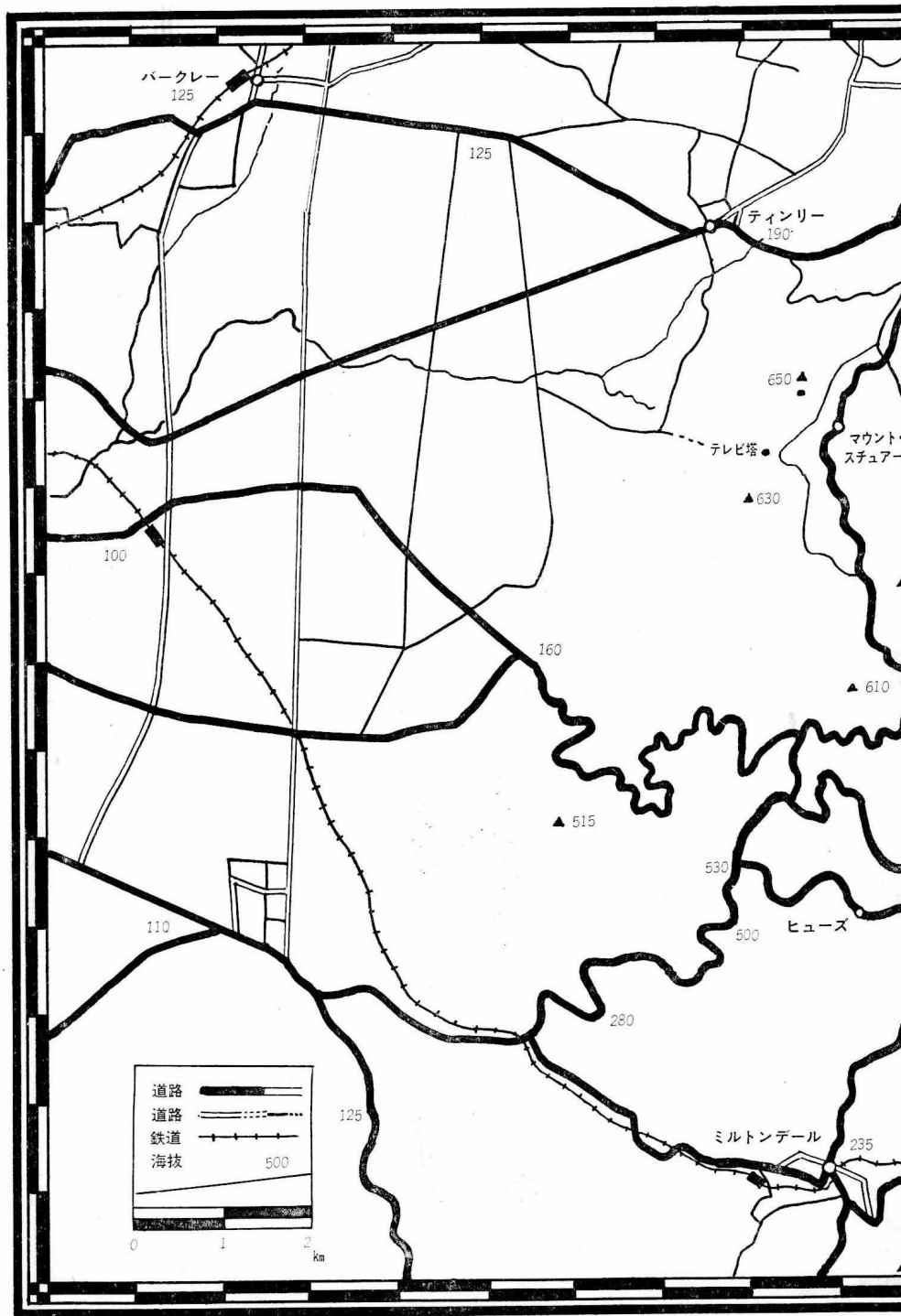
なお、グレアムたちは、山火事をおこすもになったアルコール・ランプを買うとき、ポンド通貨で買物をしているが、この物語が書かれてのち、一九六六年二月十四日に、オーストラリアでは、通貨を、ポンド制からドルに切りかえた。当時、一ポンドは、日本の金に換算すると、千二百六十円であった。

もくじ

原作者のことば	一
訳者のまえがき	二
北風	九
アツシユ・ロード	三
火災警報	五
緊急事態	六
逃亡者	一〇
退避	一四

シベリア……………	一〇
フェアホール老人……………	一六
荒れ狂う日……………	一五
ピーター……………	二五
ゆきどまり……………	三三
人びとは戦う……………	二九
目ざめ……………	二五
るつば……………	二五





北風

一月十二日、金曜日の午後おそく、三人の少年が、キャンプしていた。場所は、ティンリーの町から一キロ半ほどはなれたかん木のやぶのなか。キャンプするには、最適の場所とはいえなかった。しかし、ともかくも、ここには、水があった。それに、三人とも、ひどく疲れていた。

少年たちは、都会をのがれて、ブッシュで一週間、すばらしい自由をたのしむために、やってきたのだ。かれらにとっては、はじめての経験である。少年たちは、この旅については、何か月ものあいだ、案をねってきたのだ。最初、両親たちは反対した。つよく反対した。しかし、少年たちは、せがみにせがんだ。

最後に三人は、もし、ウォーレスの両親が賛成したといえ、グレアムの両親も賛成し、グレアムの両親が賛成したといえ、ハリーの両親も賛成するだろうという、ずるい計略を思いついた。そして、つまる

ところ、この計略は成功した。

少年たちの両親は——めったに顔をあわせることのないひとたちだったが——めいめい、ほかの親たちから保護過剰だと思われたくないと考えた。なんといっても、むすこたちは、まもなく中学四年になるこ

とはあるし——ほんの五、六日間、じぶんたちの身のまわりのことをじぶんでし、めんどろをおこさず
にすますぐらいのことはできるだろう。すこしまえまで、男の子というのは、このむすこたちの年ごろ
になれば、もう実社会に出て、働いていたものなのだ……

少年たちは、朝の汽車で、丘陵地帯にむかい、パークレー駅で下車すると、荷物をせおって、歩きだし
た。心は、ときはなたれて、うきうきとおどった。まるで囲いのなかで育てられた子馬の目の前で、緑の
牧場への門が、はじめてあけ放たれたときのようだった。

いまこそ、だれにも頭をおさえられることはなかった。「これをしろ。」「あれをしろ。」「と命令するもの
もなければ、「ここにきなさい。」「あそこにきなさい。」というものもない。少年たちは、よろこびに顔
をはてらせながら、自信ありげに、仲間をたしかめあうように、ほほえみあった。心がはずみ、口をでる
ことは、ちぐはぐだった。考えが、さきへさきへと走りすぎて、ことはがついていかないのだ。たのし
さのあまり、ハリーは歌をうたい、ウォーレスは口笛をふいた。このブッシュでの一週間を、家族といっ
しょに海岸へ二週間——いや、三週間いこうといわれたって、そんなことは、とても交換できなかった。
地球上のどこにいるよりも、いま、ここにいること、パークレーからティンリーへゆく、この道にいるこ
とが、満足だったのだ。

ティンリーへは、バスもいっていた。しかし、かれらは、バスなんかに乗りたくはなかった。自動車が一
台、うしろからやってきて、車の主は、乗っていかないとさそってくれたが、三人は手をふって、い

つてくれという合図をした。おとなの世界のわなには、絶対にひっかかるまいと、用心していたのだ。家からの自由、学校や、勉強を思いださせるものからの自由がほしく、きりのない使い走りや、音楽の練習や、女のきょうだいや、芝刈りや、あついシャワーなどのいっさいから、解放されたかった。いまは、やれ、お客だ、やれ、日曜だといつては、かたくるしい服装をさせられる必要もない。くつをみがく必要もなければ、食事のあとで、歯をみがくこともない。ねむくもないのに、ベッドに追いたてられることもなければ、まだ夢うつつだのに、起こされることもない。

グレアムの心に、詩がうまれた。グレアムには詩心があつたのだ。土を蹴るかかとのリズムから、自然にうまれた詩だった。一瞬、胸が熱くわきたち、グレアムの心に、その詩の全貌が浮かんた。しかし、ウォレスやハリーにきかせようとして、声にだして口ずさもうとすると、詩は消えた。それは、天と地のあいだのいっさいが、じぶんただひとりのものになったと思える瞬間、人生を通じて、一どか二どしか経験できないかもしれない、そのような、得がたい瞬間だった。それは、「考えたもの」というより、「感じたもの」だった。しかし、そうした詩は、やはりほかのものにきかせたり、書きとめておいたりできないものなのだろう。そうした詩は、ある瞬間だけ存在するのであり、じぶんが、世界じゅうのだけれともちがう一個の人間であり、いままでに存在したどんなものとも、どんな人間ともちがう一個のいのちだということ、まざまざとさとする、あの、心の熱くなるような、神秘的な自覚となつてのこるものなのだ。じぶんは、他の何ものでもない、他のだれともちがう一個のいのちでありながら、しかも、他のものから切

りはなされてはいない。独立した個人でありながら、同時に、すべてのものにつながっている、という、あの自覚。

北風が、突風になって吹いていた。熱い、息ぐるしい夏の風だった。空には一片の雲もなく、遠く右手には、高い地平線上に、もやのかかった連山が見えた。特に壮大で、けわしい山というわけではなく、長い年月のあいだに、かどがとれ、無数の深いひだが重なりあっている、いわば、老齡期の峰々だった。そこには、ユーカーリの巨木が生い茂り、そのところどころに家々の屋根がポツポツと見え、山火事を防ぐため、木々を伐採した防火地帯が、太い傷あとのように走っていた。すべてのものより一段と高いところには、鉄塔がそびえていた。西方の平野にあるメルボルン市に、テレビの電波を送る塔だった。

山のふもととの丘に目をやると、ここかしこの土が黄いろくやせていて、その木々は、五メートルから七メートルほどにしかのびていなかった。しかし、遠く丘陵が重なりあって、高まったあたりでは、どの丘にも、一本で、家一軒建てるにじゅうぶんなくらいの太木が育っていた。人間の背だけの三倍もあるようなシダがはえ、澄んだわき水がふき出し、野生のラン、めずらしいコケ、それに数千の小鳥や小動物のほか、おとなでも、少年でも、そこを踏みわけてはいることができないほどの草木が、うっそうと茂っている。丘と丘のあいだは、ゆるやかな斜面になっているところもあり、丘と丘がすぐつながっているところもあり、また、きゅうな崖になって、三百メートル以上の高さにきりたっているところもあった。まだここには、そこなわれないままの自然が、そこここのにこっていた。人手が加えられず、人間が住むに適

しないこのあたりは、少年が、「地上の王者」となることのできる場所だった。

たぶん、この、少年が「地上の王者」となれるなどという考えは、旅に出るまで、グレアムの頭のなかにはなかったことだ。かれは、両親が、こんどの計画をゆるしてくれようとは、思ってもいなかった。グレアムの両親は、厳格で、ある種のことについては、いたって昔風だった。ウォーレスなら、髪をすくしばかり長くすることも、大目にみてもらえたらう。ハリーも、ふだん着ならば、少々かわったものを着ても、文句はいわれなかったらう。しかし、グレアムは、そうはいかなかった。グレアムはお上品に、身だしなみよく、きちんとし、「模範的」でなければならなかった。かれは、そうしなければならぬのが、ひどくつらかった。じぶんが、「模範」になぞ、なれっこないと思っていたからだ。

グレアムのことを気にするものなぞ、だれもないのだ。かれは、じぶんでは、どことってとりえない平凡な存在だと思っていた。ウォーレスとハリーが、じぶんを友だちに選んでくれたのは、なぜだろうとよく考えた。しかし、そんなことをあんまり深くせんさくはしなかった。すれば、魔法が破れて、友だち扱いをしてくれなくなるかもしれないからだ。

ウォーレスのそばに居るのは、安心できることだった。ウォーレスは大がらで、がんじょうで、もう一人前のおとなぐらい、たくましかった。性格もつよい、と、グレアムは思っていた。いっぽう、ハリーは、気がきいていた。しかし、だれもハリーが気がきいているといって、せせら笑いはしなかった。学校じゅうで、かれくらの年で、ハリーほどはやく走れるものはいなかったからであつた。

ところが、グレアムは、たくましくもなければ、気がきいてもいなかった。かれのもっているのは、つよい感受性^{かんじゆせい}と、ひとへの思いやり、十五歳^{さき}の少年にはめずらしい、やさしさだけだった。しかも、そのやさしさを、かれは、いっしょけんめい、かくしていたのだが。かれは、よくあらっぱいもののいいかたをしたり、大声で笑^{わら}ったりして、男らしく見せかけようとした。そしてまた、ちよつともグレアムのこと^{こと}に気づいてくれたものは、かれを男らしい少年だと思った。仲間^{なか}に忠実^{ちゅうじつ}な、信頼^{しんらい}できる、かしい少年だと思^{おも}ったのだ。そして、それは、ひどく見当^{けんとう}はずれな見方^{みかた}でもなかったのだが。

三人の少年は、火ぶくれのできそうな暑い日ざしをあびながら、ティンリーに通じる道を歩きつづけた。荷物^{かぶつ}が、しだいに重く、足どりは、しだいにゆっくりなつていった。ときおり、木陰^{こかげ}にすわってすずみ、肩^{かた}をやすめた。車は、あとからあとからやってきては、乗れといってくれたが、どの車にも、手をふって、さきについてもらった。これは、かれらの旅だった。じぶんたちの力でやりたかった。

屋になると、三人は道ばたにあさい穴^{あな}を掘^ほり、小枝^{こえだ}を集めて火をおこした。そして、ソーセージをいため、インスタント・コーヒーをとかす湯をわかそうとした。かおりの高い、つよいコーヒは、男というものが、独立^{どくりつ}して生活するときにふさわしい飲^のみものだ、というように、少年たちは感じていた。しかし、ブリキの湯わかしのなかで、湯が、まだ煮^にえたちもせず、ソーセージも、ジュウジュウ、いいだしもしないうちだった。一台の車が近^かよつてきて、女のひとが、かれらにむかってきけんだ。

「その火を消^けしなさい！」